

深江 貴心（ふかえ・あつまさ） 長崎大学教育学部附属中学校 1年  
作品名 『沈黙』 遠藤周作を読んで  
読んだ作品 『沈黙』

ぼくは長崎に住んでいるので、ドライブで雲仙の温泉へ時々行くことがある。  
「あー、気持ちいいなあー。」

露天風呂からの眺めは、緑が鮮やかで、爽やかな空気の中を、白い煙がもくもくと、わき上がっている。その煙からは、卵の腐ったような臭いが漂う。ぼくは、この硫黄のにおいが好きになれない。

でも、雲仙の温泉は、気持ち良くて、確かに体の疲れもいやされる。

昔、この場所は、避暑地なので、外国人たちの社交の場であったというのは、知っていた。だが、しかし、ぼくは遠藤周作の『沈黙』という本をこの夏に読んで、その印象は、何だか深刻なものへと変わってしまった。

スイスシャレー風のモダンなホテルができる、ずっとずっと前の島原の乱が、あったころのことを……

一六三七年島原の乱が起こり、鎮圧されて間もないころ、キリシタン禁制の厳しい日本に潜入したポルトガル人、司祭ロドリゴが見た残忍な現実、雲仙地獄、悲しい歴史が心にささる。

棄教を迫る幕府側と、信奉する教えを絶対に捨てない切支丹。どちらの気持ちも、ぼくには理解できなかった。

グローバルスタンダード、モラハラ、パワハラ、コンプライアンスなんて言葉が飛び交うこの世の中に生きていくぼくには、到底理解できない。

拷問なんて、したくもないし、されたくもない。命よりも信仰が大切なのだろうか。

“空気を読んで棄教すればいいじゃないか”

残忍で衝撃的なことが長崎で行われたことを知って、ぼくは、悲しかった。

一体、宗教とは何なのか。

そして遠藤周作は、『沈黙』を通して何を伝えたかったのか。

著者はキリスト教への問いかけをしている。

救いを求めているにもかかわらず

「神は、沈黙したままである……」

沈黙 沈黙……

ぼくは、その心が知りたくて、遠藤周作文学館を訪れてみた。

風光明媚なサンセットロードが続く長崎の外海は、空と海が果てしなく続いている。海を見渡す丘の上に遠藤周作文学館は、あった。

実は二度目の訪問。生誕百周年の記念の年らしい。

グレゴリオ聖歌がずっと響き渡る青いステンドグラスを見上げて、神妙な面持ちで一つ

一つ見学して回った。十二歳、神戸で洗礼を母の影響で受けた遠藤周作。大学になり渡仏し、キリスト教信者であることを見つけ直したという。

“信仰”この『沈黙』の中で棄教を迫られながらも様々な葛藤の中で苦悶し救いを求め続ける。彼らは弱者でありながら信仰心は、強烈なものがあり、荒波のように迫ってくる。

外海を眺めながら、ぼくは『沈黙』をもう一度読み返す。

穏やかに美しく広がる地平線。この風景は、あの時代ときっと同じにちがいない。

静寂の中、この海に向かって信者たちは、何を祈ったのだろう。

「神は、沈黙したままである……」

見上げると海には小さな島がいくつもあり、夕日に照らされている。

ぼくはなんだか切なくなつた。

ぼくはキリスト教信者ではない。でも祈ったことは、寺でも神社でもたくさんある。ついこの前だつてスピリチュアルスポットとして有名なあるお寺へ行つて、お坊さんの説法をきいた。願い事が一つ本当に叶うらしい。心の中で住所と名前と願い事を一つ唱えるように教わつた。ぼくは、願い事を一つだけ心から祈つた。

ぼくの祈りなど信仰とは、縁遠いものである。

この本を読んで人生と信仰の意味を考えた。

思想や信念を暴力によってゆがめざるをえなかつた人間の気持ち。

それが『沈黙』の本を読んで、心につきささつた。

長崎には、教会があつて、雲仙の地獄温泉そして外海の果てしなく広がる海の景色。

この『沈黙』を読んで印象が、がらりと変わった。良いとか悪いとかの印象ではなく、あんな歴史があつて、沈黙のまま、時は流れ、静かに穏やかに力強く存在している。

ぼくは、その風景が、まぶしくて、心を引きしめて、じっとみつめる。この本に出会つてよかった。ただこみ上げてくるものがあつて、ぼくは、それ以上、語ることも出来ない。